

## ⑤ 二川茶屋

東海道53次の33番目の宿場町「二川宿」。街道には旅人がひと休みできる茶店がこんな風にあったのかも知れないと思われる「二川茶屋」。

「ちよつと気楽におしゃべりするところを作りたい」。そんな思いに駆られた村松洋子さん(71)。旧東海道沿いにあるたお菓子屋さんが閉店することになり、そこを賃借して2010年10月に開設し

て、7年目を迎える。何せ資金がある訳でなく、賛同する人に10000円の出資を求め、布製の小物や手提げバッグ作り、時には近くの農家が持ち込む野菜や鉢植えなどの売り上げで運営をまかない、家賃も高齢の大家さんの見守りも兼ねて、持ち

つ持たれたつ関係で成り立っている。

## 地域の人の居場所に―二川宿でちよつとひと休み

オープンし、ウォーキングや県外から観光客も多い。

光として立ち寄るおテーブルの雑記帳には、そんな旅人の

テ―プルの雑記帳には、そんな旅人の

手伝っているスタッフは春日康子さん(69)と田中美知代さん(69)。「ほつとしてお茶を飲んで、一休みしていただけたらうれしい」と話す。二川宿本陣資料館に加えて、一昨年には商家「駒屋」が

おたがいさまの  
まちづくり



地域の活性化に向けて笑顔と笑いの絶えない二川茶屋

思いが書き留められている。神奈川県から来ました。二川宿のたたずまいを思わせるような二川茶屋に立ち寄ることができ、皆さんとの楽しい会話で癒やされました。「京都から東京の日本橋に向けて夫婦で走ってきまして、おいしいお茶と楽しい会話で元気をいただきました」などと綴られている。

そのような人たちに「二川宿」のお土産として買ってもらうような商品を作るつと検討中。

そしてまた、二川は群馬県出身の小淵しちさんによる製糸業復興を巡る物語の場。そんな「糸のまち二川」を「もっとたくさんの人に知ってもらい、地域の方の居場所になれば」と村松さん。

「二川茶屋」は居心地のいい居場所だった。

※次回は8日掲載予定